

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ
Quarterly magazine FOYER
2025 Autumn

つながる、ひろがる、あつまる
ほわいえ

026

FOYER

Special feature 特別対談
劇作家・チェルフィッチュ主宰 熊本県立劇場館長
岡田 利規 × 姜 尚中

Special feature 熊本県芸術文化祭オープニングステージ
はじまり はじまり ～県劇舞台づくり学校～
クリエイション日記



 熊本県立劇場
KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

【企画・発行】
公益財団法人 熊本県立劇場
熊本市中央区大江2-7-1 〒862-0971
www.kengeki.or.jp

【編集・制作・印刷】
株式会社 ジャム
熊本市中央区練兵町45早野ビル1階 〒860-0017
www.jam-cf.com

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ 2025 Autumn 発行日:2025.9.20 ※掲載内容は8.31現在のものです。

劇作家・チエルフィッチュ主宰

岡田利規

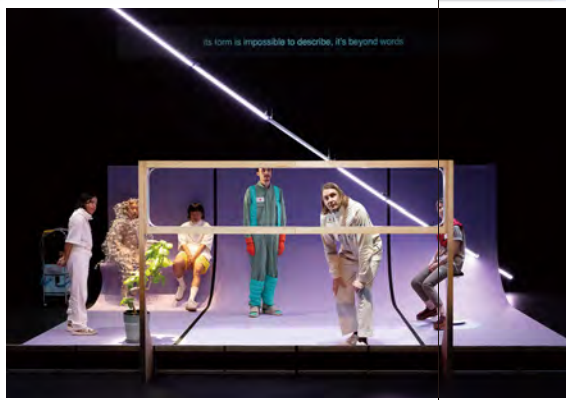
熊本県立劇場館長

姜尚中

言語を入口として垣間見える

『宇宙船イン・ビトゥイン号の窓』の挑発

熊本県立劇場の演劇ホールの舞台上につくられた約150人収容の観客席と舞台セット。演じる者と観る者が同じステージ上で対峙する、いつもとは違うホールの空間で『宇宙船イン・ビトゥイン号の窓』は上演されました。2025年8月2日、3日の2日間の熊本公演を皮切りに、全国3カ所で上演された本公演。日本語を母語としない俳優が、ネイティブ言語ではない日本語で演じる演劇作品を手がけた劇作家の岡田利規さんと、県立劇場の姜尚中館長が、言語の本質をテーマに語り合いました。



東京初演の様子 ©前澤秀登

起源を求めてしまう言語の世界、それを宇宙という舞台で描く理由

姜 今回の岡田さんの『宇宙船イン・ビトゥイン号の窓』は、さまざまなことを考えさせられる作品でした。正直いうと、最初は散文化的感じがして、どのくらい時間かかるかな(笑)と思ってたんですけど。岡田ワールドに騙された、というか、どんどん引き込まれていったって感じです。

姜 個人的には岡田さんの発想自体が宇宙人じゃないかなと思うくらいおもしろくて(笑)。言語は言葉を分節化するから、必ず違いを入れますよね。それは差別につながる面もあると思いますが、この作品のテーマは言語、無言語の世界を、地球上ではなく宇宙で描くという大胆な飛躍があって驚きました。

岡田 そもそもその発想は、ネイティブじゃない人の日本語が、日本の演劇の中で発話される機会がほとんどないことを、つまんないなと思っていたことからです。一方で、日本語ネイティブの俳優の舞台上での発話が、演じる側も観る側も予定調和的なものがあることも、つまんないな、と感じていました。演劇における

日本語の発話そのものを、攪乱してみたいという発想からスタートしました。ネイティブじゃない人の日本語劇の舞台を日本にしちゃうと、その人が留学生とか、コンビニで働いている人とか、そういう設定になってしまうがち。日本以外の地域を考えたら、宇宙に行くしかないと思います。こういう作品になりました。

宇宙船イン・ビトゥイン号の窓 作・演出 岡田 利規
2025年8月2日(土)・3日(日) 熊本県立劇場 演劇ホール舞台上

とある言語の衰退を食い止めるために、宇宙船イン・ビトゥイン号に乗り込んだ4人の乗組員と1体のアンドロイド、そして銀河の旅途中で遭遇する地球外知的生命体。宇宙を漂いながら、重大なミッションを遂行するために言葉をめぐる対話が宇宙船内で繰り広げられるSF演劇。日本語を母語としない4人のノンネイティブの俳優と2人のネイティブの俳優によって演じられる独特な世界観。それは、発音や文法の「正しさ」ではない、演劇における日本語の可能性をひらくためにワークショップを実施し、その中で出会った俳優とともにつくりあげてきたものです。2年ぶりとなる日本での上演は、熊本県立劇場でスタートを切りました。この日のために特別にセッティングされた舞台上の観客席の目の前で、臨場感と没入感のある演劇が披露されました。

様式化への反発と受容。言語に対する挑発

姜 日本語の発話がある程度様式化されていることへの反発が今回のプロジェクトの出発点ということで、大変なチャレンジだったと思います。

岡田 基本的に僕の考え方は、様式を嫌うというか、それを壊したいというか、それがベースにあります。ただ、それがうまくいったと自分が感じると、より深く追求したくなり、それが自らの様式化につながっていくんですね。そ



宇宙船の中で繰り広げられる対話にどんどん引き込まれていく
東京初演の様子 ©前澤秀登

うすると、様式っていうのも悪いものでなく、重要なものとして見方が変わってくる。そうすると葛藤が生まれるんです。様式くそ食らえ、という気持ちと、様式いいかもな、という気持ちで。そういうアンビバレントな状態を常に自分の中に持っていることは、悪いことじゃないと思います。

姜 きつとそれはイノベーションですよ。様式のような安定したもの、新しいものと信じて追求していくこと、古来からの伝統などに新しい価値を見出すこととか。

岡田 演劇というものを、ちょっとでも前に進めていきたいというか。自分の中で試行錯誤した時に、日本語の発話のクオリティを上げたいと。クオリティというのは、イントネーションの美しさではなく、舞台上で発されている言葉が伝わってくるということ。あたりまえのことだけど、そのあたりまえのことがそんなに起こっていない。そこを変えたいんです。ある種の挑発なんですよ。

姜 挑発されていると感じましたよ(笑)。この作品で舞台上の

岡田 確かに、言語よりも感情の方が強いですよ。

姜 『宇宙船イン・ピトゥイン号の窓』の登場人物の間で、音についての議論があります。発話としての言語は音なので、空気がない宇宙で言葉がそもそも伝わるのかどうかと考えさせられました。

岡田 その議論は劇中のエイリアンから発せられています。そのエイリアンを日本語ネイティブが演じています。人間の乗組員がノンネイティブで、エイリアンやアンドロイドをネイティブ。マジORITYとマイノリティの構図をひっくり返しました。音というのは人間にとつて可聴域のことで、波長ではない。普段は考えないことを、宇宙に行けば考えるコンディショ

岡田 これは言葉についての作品です。言葉が生みだす、差別の



OKADA TOSHIKI
劇作家・チェルフィッチュ主宰 岡田 利規

ようなことも時には起こる。それが同時に、観客としての自分の中でも起こると思うんですよ。例えば、ネイティブの発音の日本語じゃない日本語を話す乗組員たちの言葉に笑う観客がいる。その観客に対して、モヤッとする。私たち、ネイティブじゃない日本語の体験において、まだだいぐう

なんです。観劇を通してそうした経験を、さまざまに考えを巡らせることは価値があります。作品を単に受け取るだけでなく、その上演の場で自分が何かを考える、感じる、たとえば作品ではなく別のことへの連想でも、全て鑑賞体験です。それを受け取ってほしいですね。

姜 演劇とか音楽に対してオーディエンスが求めることは、定型化されたものを再確認したいということだと思います。そういうオーディエンスに対して、岡田さんは挑発したいと。

岡田 そうです。自分が受け手だったら、どんな形式の芸術でも、観た後で「自分が変わったな」と感じられた時によかったなって

俳優が、「こういう喋り方をして、こういうイントネーションになるよね」という私たちが当然と捉えるものが一切なく、ものすごく戸惑いを持ちました。なんだか、不気味なところがある。岡田さんは挑発することで、異化作用みたいなものをつくり出そうとしているのですか。

岡田 異化作用を起こしたいということは基本的にあります。予定調和というか、その中に収まっていると、内容がどんなに悲しかったり、凄惨だったりしても、安心して観られますよね。僕はそれを心の底からつままないと思っていて、そこを崩したい、ひっぺがしていかないと、だから不気味なものになっているんじゃないかと。

姜 それは、岡田さんのアーティストとしての原点ですね。言語を介さない身体運動もあるのですが、今回の上演で言葉について考えさせられました。いろんな意味で言語の分節化によって、対立が広がっている一面もあると思うのです。岡田さんにとって言語、言葉というのは、どんな存在ですか。

岡田 言葉は両義的だと思うんですよ。言葉を成立させるために



KANG SANG JUNG
熊本県立劇場館長 姜 尚中



最終リハーサルの様子。演劇ホールの舞台上に組まれた観客席と俳優たちの距離が一体感を生み出している

はじまりはじまり〜県劇舞台づくり学校〜 クリエイション日記

熊本県芸術文化祭の幕開けを華やかに飾る「熊本県芸術文化祭オープニングステージ」。

第67回となる今回は、荒井良二さんの絵本『はじまりはじまり』を原案に、ダンス作品を上演しました。

今年の春、熊本県内から参加者を公募し、集まったのは学生クリエイター23名、こどもパフォーマー18名。学生クリエイターが舞台で使う音楽や映像、出演者の衣裳を、小学生のこどもパフォーマーが自分たちが着る衣裳とダンスを作り、みんなで力をあわせてひとつのダンス作品を創作しました。舞台のタイトルは『はじまりはじまり〜県劇舞台づくり学校〜』。
今回はそのクリエイションの様子をお届けします。

学生クリエイター開校式 2025年6月7日(土)

はじめに、すべての学生クリエイターが集まり、開校式が行われました。参加者と先生の紹介からスタートし、参加者たちは実際に公演を行う演劇ホールに移動、下見を行います。客席と舞台上から、まっさらな会場を見学し、その広さに圧倒される参加者たち。その後、各セクションの先生から、この舞台づくり学校で取り組むことが紹介され、全員で各セクションのクリエイションを体験しました。

学生クリエイタークリエイション 2025年6月8日(日)〜 2025年6月13日(日)

翌日からは音楽・映像・衣裳の3セクションに分かれ、クリエイションがスタート。先生からのレクチャーを受けながら、各セクションで試行錯誤が始まりました。



各セクションごとにチームで相談をしながらイメージを形にしていきました



こどもパフォーマーの衣裳づくりの最終日には、ランウェイを歩くファッションショーも！



総合演出の古家さんと一緒に、笑顔いっぱいクリエイションに取り組みました！

こどもパフォーマー開校式 2025年7月13日(日)

学生クリエイターたちの活動がすすむ中、7月13日にはこどもパフォーマーの開校式を実施しました。はじめて顔をあわせる小学1年生から5年生までの参加者たち。ダンサーの古家優里さんと仁科幸さんによる歓迎のダンスを緊張の面持ちで観る参加者たちでしたが、名前を呼びあうゲームでぐっと距離が近くなりました。その後、舞台づくりについての説明を受け、後半は「もし食べ物キャラクターだったら？」をテーマに、好きな食べ物や嫌いな食べ物について考えました。色や着ている服、必殺技などを楽しく絵や言葉にしていきます。このクリエイションがその後の自分のダンスや衣裳づくりのベースになっていきます。

こどもパフォーマークリエイション 2025年7月20日(日)〜

開校式の翌週からは、クリエイションのスタート。まずは体を楽しく動かし、衣裳をつくる中で、仲を深めていきました。その



後は課題の振付を覚えたり、自分のパートの振付をついたり、本格的なダンスの創作に入っていました。

この夏は、学生クリエイターやこどもパフォーマーが毎週のように県劇に集まり、たくさんひらめきを持ち寄って、ひとつのダンス作品を完成させました。公演本番は9月21日。この季刊誌が発刊される頃には、すでに終了しています。いったいどんな作品に仕上がったのか——詳細は次号でたっぷりご紹介します！

■みなさまの声にお応えします！

県立劇場への交通アクセス情報が知りたい！

今回は拡大版として劇場への交通アクセス情報をまとめてご紹介します。

Q1

県外から劇場への交通アクセスは？

劇場HPの「交通アクセス」に主なルートと所要時間をまとめています(右図)。その中でも「JR水前寺駅」の利用がオススメです。JR熊本駅から乗車時間約15分、駅の北口から劇場まで徒歩約15分です。道はほぼ一直線なので迷うこともありません。

阿蘇くまもと空港からは熊本市内行きの空港リムジンバスに乗り、「味噌天神」バス停下車、徒歩約20分です。また、桜町バスターミナルからは、「県立劇場前」行きのバスもございます。



熊本県立劇場 | 交通アクセスページ

Q2

「県立劇場前」バス停のバスの本数は？

「県立劇場前」バス停は1時間に平均1～2本バスが運行しています。但し早朝や夕方以降は本数自体が減るので、劇場から徒歩約10分の距離にある「大江渡鹿」バス停が便利です（7時台～19時台は熊本駅行き、桜町バスターミナル行き共に1時間に最低2～3本はあります）。

Q3

駐車場の利用時間、料金は？

基本利用時間は8:30～22:30です。22:30以降の駐車及び駐泊はできません。普通車は400円、大型車800円です(前払制)。

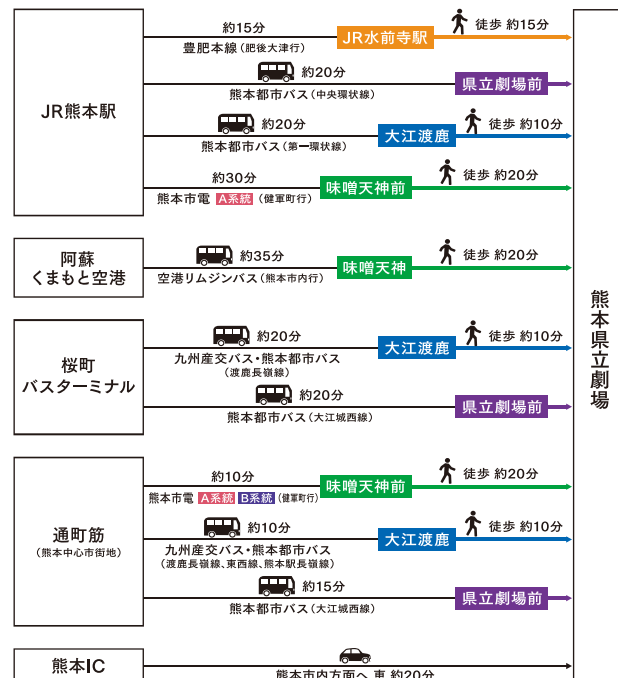
※大型車は定員11人以上、または最大積載量5トン以上の自動車

※駐車場ゲートの高さ制限3.5m

Q4

駐車場は予約制ですか？

予約制ではありません。HPの「駐車場規制のお知らせ」カレンダーの「満」の記載は予想です。最新状況は「駐車場の空車状況」で随時更新しています。なお、多数の来場者が見込まれる日は、劇場利用でない方の入庫をお断りする「入庫規制」を実施します。あらかじめご了承ください。



フルート演奏者仲間として「エンジェルプレス」の二人も参加した「フルートの森コンサート」

利用団体公演レポート

フルートアンサンブル「エンジェルブレス」
フルートの森コンサート

2025年7月21日(月・祝) 熊本県立劇場コンサートホールホワイエ

はしまりは9年前の山鹿市の小さな喫茶店だったという「フルートの森コンサート」。フルートを愛する演奏者が集まり、それぞれに思い入れがある曲を披露するフルートづくしのコンサートは、これまでさまざまな場所で開かれ、9回目にあたる今年は県立劇場コンサートホールのホワイエで開催されました。照りつける真夏の日差しを窓の外に見ながら、フルートの優しい音色に包まれるホワイエの空間は、暑さを忘れさせてくれる特別なひとときとなりました。

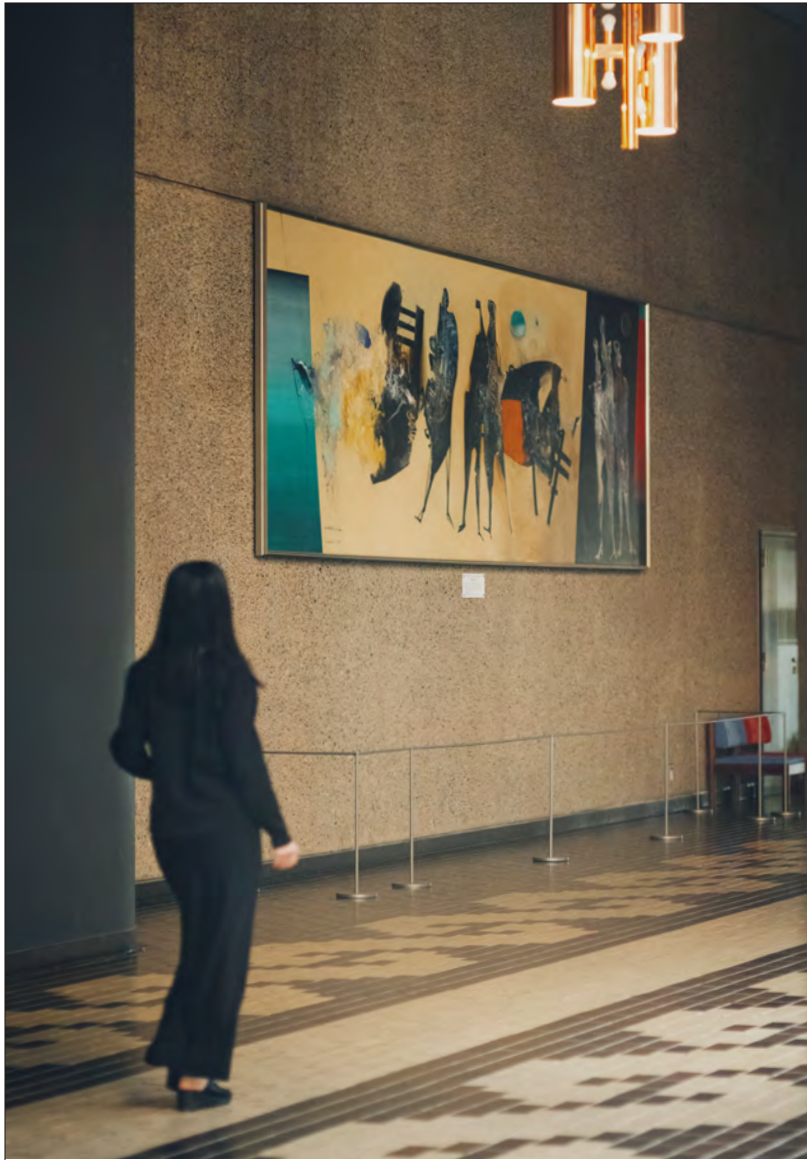
プログラムの後半に、カール＆フランクツドップラーの「プラハの思い出」を演奏したのは、今回ご紹介する「エンジェルブレス」の松島里絵さんと山内麻祐子さんのおふたり。つなぎめを感じさせな

い、流れるようなフルートの二重奏は、まさに「息があつた演奏」という表現がぴつたりでした。

フルートアンサンブル「エンジェルブレス」のメンバーは、今回のコンサートで演奏したおふたりと、牛島梨紗さん、松村光子さんの4人。2011年に結成し、2015年からは現在のメンバー体制となり、自主企画での演奏会や、朗読や歌とのコラボなど、多方面で活動を行っています。「年齢はバラバラだけど、フルートが大好きだ」という共通点があり、一緒に演奏するのが心地よいから続いています」と山内さん。「単音しか出せないフルートだからこそ、アンサンブルで美しい和音を届けたい」と、松島さん。今後も息のあつた、息の長い活動が期待されます。



「フルートは演奏すればするほど完成がなく、
そこがおもしろいので伝えていきたい」
と語る山内麻祐子さん(左)と松島里絵さん(右)



株式会社ニュースカイホテル所蔵 1981年制作 600×200cm 絵画

県立劇場ギャラリー

人類の行進 MARCHA DA HUMANIDADE (マナブ間部 作)

熊本県立劇場の館内に多数展示されているアート作品。
今回は「人類の行進」をご紹介します。
モール(廊下)に掛けられている横長の大きな絵画は、熊本県宇土郡不知火町(現・宇城市)出身で、ブラジルを代表する抽象画家、マナブ間部の作品です。1983年、熊本市のニュースカイホテル(現・ANAクラウンプラザホテル熊本ニュースカイ)に25階建ての東館が増設されたとき、ロビーの壁面に収まるように描かれたのがこの絵画。大胆な色面と繊細な線で描かれた、傑作の一つです。2005年のホテル改修以降、縁あって熊本県立劇場に貸与されることとなりました。
この絵画に添えられたマナブ間部の言葉が、作品に込められた想いを十分に伝えています。「我らはより良く生きるため文化を目指して行進する。(一部抜粋)」文化芸術の空気漂う熊本県立劇場で、作者の作品への想いと併せて、ぜひご自身の目でこの絵画をご鑑賞ください。

■熊本県立図書館タイアップ企画「本の中にある劇場」

熊本県立図書館 情報支援課 主任主事
青木 道子「あおき みち」

少女たちの戦争

戦後80年の今年、「戦争」や「平和」について考える機会が増えた方も多いのではないだろうか。
戦争体験という、悲惨で特別なものと感じられがちですが、その背後にはさまざまな日常がありました。
この本に書かれているのは、石牟礼道子さんたちが少女だった頃の、日常の延長にある「戦争」であり、戦争が生活の中に深く入り込んでいたことに気づかされます。
彼女たちの日常の中からは、体験者にしか紡げない強い言葉



編／中央公論新社 出版／中央公論新社

が生まれ、その言葉に触れると、当時の風景が生々しく浮かび上がります。
「繰り返し執拗に襲う飛行機は巨大な鳥に見えた」と語る向田邦子さんや、「八月六日の朝、世界が瞬時に漂白されるような光に打たれた」と語る大庭みな子さんたちの記憶は、今もお私たちの心に強く訴えかけられます。
記憶の継承者が年々少なくなる中で、私たちは次の世代へどう伝えていけるのか。
舞台芸術と本が持つ「記憶を未来へつなぐ力」を信じ、劇場や図書館がその架け橋となり続けることを願っています。

県立図書館とのタイアップは2007年度から続いています。このコーナーでは、図書館職員おすすめの一冊をご紹介します。

■県職員が本音を綴るリレーコラム

施設サービスグループ
寺川 希「てらかわのぞみ」

「日常に、劇場を。」



「日常に、劇場を。」は開館40周年を機に、熊本県立劇場が掲げたスローガンです。もともと私は大学まで体育会系で育ってきた人間で、文化・芸術というものにはほとんど関わりがなかったのですが、恩師からの後押しもあり劇場に勤めることとなり今に至っています。勤めるまではクラ

シックとは無縁だった私も、あることがきっかけでクラシック音楽への関心が以前よりも高まったような気がします。

熊本地震後にあった玉置浩二さんの復興コンサート(玉置浩二さんの歌声がもとめ好きだったので)をコンサートホールで生の歌声とオーケストラの演奏を聴き(もちろんチケットを購入して)自然と涙が溢れ感動したのを今でも鮮明に覚えています。最近、時代の流れを感じることが多くなっていて、またクラシック音楽を聴く機会を持た

ずらなと思うようになりました。
普段は施設サービスグループに所属しており、ホールや練習室などの貸館について文化団体の皆さまやプロモーターの皆さま、チケットを購入されるお客様など幅広い方々と接する機会が多い部署で働いています。

自分へのご褒美ではないですが、自身の働く場所の誇れるホールでまた生の演奏を聴く日を楽しみに、また劇場が利用者の皆様の日常の一部になれるよう、これからも頑張っていこうと思います。

寄稿

熊本市立大江小学校 校長
杉本 佳秋「すぎもと よしあき」
熊本県立劇場と大江小学校のつながり
音楽が紡ぐ31年の歩み

平成7年度から始まった熊本県立劇場でのスクールコンサートは、本年度で31回目を迎え、大江小学校の大切な文化活動として継続されています。また、昨年度の創立150周年でも、学校の歴史を振り返る発表を通して、地域への感謝の気持ちを伝えることができました。

これまでの歩みの中では、新型コロナウイルス感染症の影響により、保護者向けにリモート配信を行った年もありました。画面越しでも子どもたちの演奏は多くの人々の心に届き、音楽の力を改めて実感する機会となりました。また、熊本地震の後には、復興への願いを込めたメッセージを音楽に乗せて届け、子どもたち自身が希望の灯をともし存在となりました。

県内屈指の文化施設である熊本県立劇場で演奏する経験は、子どもたちにとってかけがえのない思い出となり、表現力や協調性を育む貴重な機会となっています。今後、このつながりが、子どもたちの未来を支える場として、さらに豊かに広がっていくことを願っています。



令和6年12月熊本市立大江小学校
150周年記念式典・ハートフルコンサート